PROGRAM

メンデルスゾーン：厳格なる変奏曲 ニ短調 作品54

ラヴェル：水の戯れ

リスト：ハンガリー狂詩曲 第13番 イ短調

（稲川 瑞穂）

ラヴェル："鏡"より 洋上の小舟、道化師の朝の歌

（斉木 瞳）

休　憩

ベートーヴェン：ピアノソナタ 第23番

へ短調 作品57「熱情」より 第1楽章

（斉木 瞳）

ショパン：ピアノ協奏曲 第1番 ホ短調 作品11

（稲川 瑞穂・斎木 ユリ）

楽曲解説

メンデルスゾーン：厳格なる変奏曲 ニ短調 作品54

ドイツ・ロマン派の代表的な作曲家の一人であるフェリックス・メンデルスゾーン（1809－1847）は、ピアニスト、指揮者としての活躍のみならず、バッハの作品復興、ライプツィヒ音楽院の設立、オーケストラ団員の社会保障の充実に尽力するなど、様々な角度から19世紀の音楽界に影響を与えた人物である。厳格なる変奏曲は1841年に作曲された。曲は、主題と17の変奏とコーダから成り、調性は第14変奏（ニ長調）以外はニ短調を貫いている。作曲のきっかけは、ドイツ・ボンのベートーヴェン記念像の建立資金を捻出するため、ウィーンの出版社が当時活躍していた作曲家達に作品を依頼し、ピアノ曲集「ベートーヴェン・アルバム」の出版が企画されたからであった。この曲集にはメンデルスゾーンの他に、ショパン、リスト、ツェルニー、シューマンなどが曲を寄せており、1842年に出版された。変奏曲を3つしか作曲しなかったメンデルスゾーンにとって、生前に出版した唯一の変奏曲だが、それだけに彼の音楽を理解するための重要な一曲である。

ラヴェル：水の戯れ

ジョゼフ＝モーリス・ラヴェル(1875－1937)は、フランス南西部のスペイン国境に近いバスク地方のシブールにて、スイス人の父とバスク人の母の間に生まれた。ラヴェルは生後3か月でパリに移住し、音楽好きだった父の勧めで6歳からピアノを始め、12歳から和声法を学び、14歳の時にパリ音楽院へ入学した。「水の戯れ」はパリ音楽院在学中の1901年に作られた。ピアノ演奏技術において憧れであったリストの作品の影響も強く受けたとされているが、楽譜冒頭にはアンリ・ド・レニエの詩「水の祭典」からの引用で「水にくすぐられて微笑む河の神」とテキストが綴られている。曲は作曲の師であるフォーレに献呈された。

リスト：ハンガリー狂詩曲 第13番 イ短調

ハンガリー出身のフランツ・リスト（1811－1886）は、父親がオーストリア系ハンガリー人で母親がドイツ人であった為、家庭内ではドイツ語が使われ、ドイツ系主流の地域に住んでいたこと、また12歳で本拠地をパリに移したこともあり、ハンガリー語をほとんど話せなかったようである。しかし、リスト自身はハンガリー人としての出自に強いアイデンティティを持っていた。そして1851～53年に15曲のハンガリー狂詩曲を作曲した。これはジプシー楽団による演奏スタイルの影響を大きく受けている。そのスタイルとは、ゆったりとしたテンポから始まり、だんだん速くなり、最後は熱狂的に終わる、というものである。この第13番も、イ短調のゆったりとした前半とイ長調の早いテンポの後半の2部構成となっている。

ラヴェル："鏡"より 洋上の小舟、道化師の朝の歌

ラヴェルはドビュッシーと共に印象主義の作曲家とされることが多いが、実際の作品は古典主義的な傾向が強い。その古典的な形式に新しい響きを融合させるというのが彼の特徴の一つである。また「管弦楽の魔術師」とも言われ、精密機械を作るような精緻な書法は「スイスの時計職人」と高い評価を得ていた。"鏡"は1904～05年、ラヴェルが30歳頃に作曲され、1.蛾、2.悲しげな鳥たち、3.洋上の小舟、4.道化師の朝の歌、5.鐘の谷、の5曲から成るピアノのための組曲である。本日演奏される「3.洋上の小舟」と「4.道化師の朝の歌」は、後にラヴェル自身により管弦楽曲に編曲された。

ベートーヴェン：ピアノソナタ 第23番 へ短調 作品57「熱情」より 第1楽章

ドイツ・ボン出身のルートヴィッヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770－1827）は、その生涯で32曲のピアノソナタを作曲した。その中でも最高峰を位する傑作と言われる「熱情」は、多くの名曲が生まれたことでロマン・ロランから「傑作の森」と評された期間の只中である1805年に作られた。これはピアノ楽器の性能が向上した時期とも重なる。1803年、彼に贈られたフランスのエラール社のピアノの音域は、それまでより6鍵多くなり最高音が広がった。その上、鍵盤の返りが速くなったので連打も弾きやすくなり、さらに、音量の強弱幅も大きくなっていた。この新しい楽器の絶大な可能性に触発されたインスピレーションの中から生まれてきたのが「ワルトシュタイン」であり、この「熱情」である。また、同時期に交響曲第5番「運命」も作曲途中であったが、あの有名な「♪♪♪♩ タタタタ～ン」という動機が「熱情」の1楽章にも繰り返し現れており、ベートーヴェンの創作意欲が多くの曲の間に響きあっていることを感じ取ることができる。音楽的な聴きどころに満ちた曲である。

ショパン：ピアノ協奏曲 第1番 ホ短調 作品11

ピアノ協奏曲第1番はフレデリック・ショパン（1810－1849）が20歳の時に書かれた。幼い頃から音楽の才能を発揮し8歳から演奏会で活躍していたショパンは、ワルシャワの高等音楽学校を卒業する頃にはポーランドで絶大な人気と名声を得ていた。ウィーン演奏旅行の経験後、外国で研鑽を積もうと決心し、1830年11月に再びウィーンへと発つことが決まった。その出発前にワルシャワで演奏会を行ったが、その時に初めて披露されたのがこの協奏曲第1番であった。長く壮大なオーケストラパートの後に、決然と踏み出すピアノによって、ショパン自身の故郷への告別や、将来への期待と不安が印象的に歌われて始まる。故郷ポーランドを取り巻く時代背景の不穏さと西欧のきらびやかな世界への憧憬が躍動して交錯するような、ショパンにとって自信作の一つである。